

第4図は、海岸および内陸について、強・中・弱風群ごとに各風向がもつ地点数を季節をこみにして集計、比率で示した。海岸弱風群を除き、いずれも西風成分の地点が多い。内陸の強風群ではやや北風成分に傾くが、弱風群では逆に南風成分をもつ地点が多くなる。

次に、風速 2 m/s 以上および風速 2, 3 m/s について、最頻風向別地点数の差を記したのが第4表である。表中の正値は、風速 2 m/s 以上の地点数の方が多いことを表す。海岸強風群では西風成分をもつ風向では殆ど正値をとるので、風速 4 m/s 以上の風はとりわけ西寄りのものが多く、かつこの風を加えることによって最頻風向をも西寄りに変え得るほど高い比率で吹くことが分かる。海岸中風群もこれと類似の傾向を示すが、他の群の傾向ははっきりしない。

本報で最頻風向を求めたのは、風速 2 m/s 以上の風のうちの大半が吹く方向、を求めておくことが、周辺地形のデータを観察する際に役立つと考えたためである。実際、最頻風向に沿って地形データを観察することが、説

明変数を作成する過程で、しばしば必要となった。また第2報で、内陸立地点においては16方向のいずれから風が同等の可能性で侵入すると考えたが、最頻風向の集約結果から、必ずしもそうでないことが分かった。したがって、類似性行列の作出について再検討が必要であろう。

次稿以降で、予測のための説明変数、予測手法について述べる。

## 文 献

- 橋口渉子, 1983: 農業利用における小規模風エネルギーのメッシュデータによる評価方法の研究 第1報, 第2報, 天気, 30, 367-384.  
 本間琢也編, 1979: 風力エネルギー読本, オーム社, 東京, 68.  
 根山芳晴, 1974: 海陸風と山谷風との相互作用について, 天気, 21, 587-589.  
 吉野正敏, 1961: 小気候, 地人書館, 141.

## 日本気象学会誌 気象集誌

### 第II輯 第62巻 第3号 1984年6月

- 林 祥介・松野太郎: 球面上におけるロスビー波束の振幅  
 和方吉信・瓜生道也: 準共鳴ロスビー波について, 第I部 外部波  
 幸野淳一: 非定常大振幅プラネタリー波による成層圏オゾン輸送  
 村上多喜雄・中沢哲夫・J. He: 1979年北半球夏の40日~50日周期振動 第I部 位相の伝播  
 村上多喜雄・中沢哲夫・J. He: 1979年北半球夏の40日~50日周期振動 第II部: 熱と水蒸気の収支  
 秋山孝子: 梅雨前線上の中間規模雲 cluster 第I部 発達過程と微細構造  
 秋山孝子: 梅雨前線上の中間規模雲 cluster 第II部 熱・運動場と熱収支  
 穂積邦彦・孫野長治: 冬の季節風時の日本海上の収束雲帯の構造  
 藤部文昭・浅井富雄: 夏の相模湾沿岸における海陸風の構造  
 黒田登志雄: 氷結晶の気相成長の律速過程 第I部 理論的考察  
 黒田登志雄・権田武彦: 氷結晶の気相成長の律速過程 第II部 理論と実験の比較による表面カイネティック過程の研究  
 高村民雄・田中正之・中島映至: エアロゾルによる散乱光から推定される複素屈折率及び粒径分布の湿度依存性